

大沼芳幸 著

# 明智光秀と琵琶湖



海青社

## 序

明智光秀に関しては、反逆者のイメージがどうしても先に立つ。その人物像にしても、「温厚な文化人」と評価されることが多いが、一方では、

彼は、裏切りや密会を好み、刑を課するに残酷で、独裁的でもあったが、己を偽装するのには抜け目がなく、戦争においては謀略を得意とし、忍耐力に富み、計略と策謀の達人であった。

また、築城のことに造詣が深く、優れた建築手腕の持ち主で、選り抜かれた闘いに熟練の士を使いこなしていた。

（ルイス・フロイス『日本史』）

のように、全く逆の人物像が記録されている。本能寺の変の原因説についても、細かなバリエーションを含めれば二〇〇程の説があるといわれている。真実は一つしかないが、その各々の説を唱える者にとっては、それぞれ

が事実である。もはや真実の解明は、不可能に近いと言わざるを得ない。

一方、光秀は最後まで、活動の基盤を琵琶湖が創り出した近江に置いていたことは、間違いない。晩年、近畿管領的な地位を得るが、その本拠はあくまでも琵琶湖の畔の坂本城である。この動かしがたい事実を踏まえるならば、本能寺の変の原因を琵琶湖に求めることも間違いとは言えない。

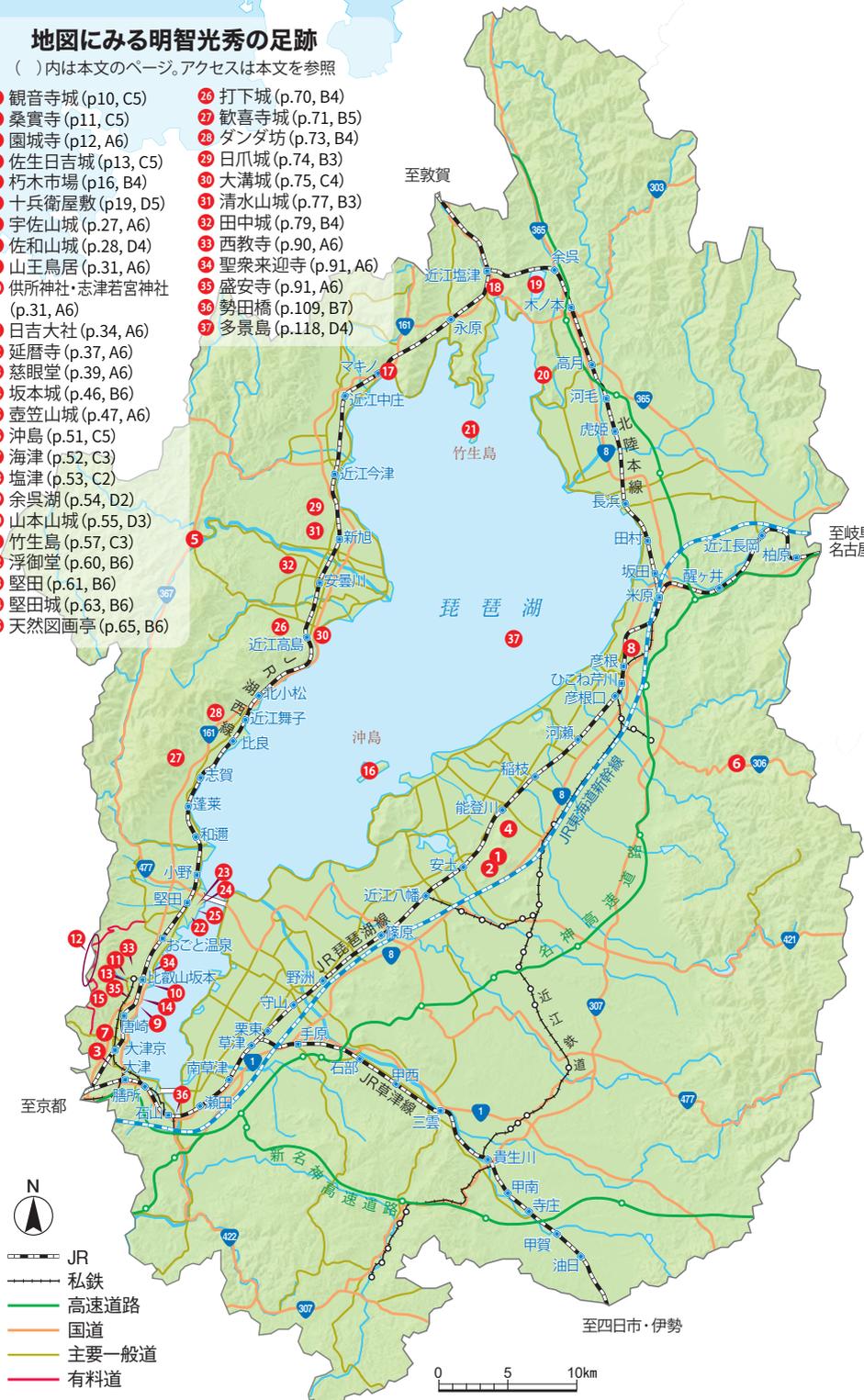
本書では、琵琶湖を通して光秀の行動を追い、ここから焙り出される光秀の人物像に迫る。そして、何故、光秀が本能寺の変を決断したのか、その思いに迫るため、要所で「明智光秀」に、一人称で想いを語らせた。

そして、本書には、この想いを読者が共有し、実際に光秀に関連する歴史文化遺産を探访していただくための、ガイドブックとしての役割も担わせている。本書を片手に、明智光秀を巡る歴史の旅にお出かけください。

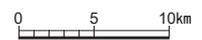
# 地図にみる明智光秀の足跡

( )内は本文のページ。アクセスは本文を参照

- 1 観音寺城 (p.10, C5)
- 2 桑實寺 (p.11, C5)
- 3 園城寺 (p.12, A6)
- 4 佐生日吉城 (p.13, C5)
- 5 朽木市場 (p.16, B4)
- 6 十兵衛屋敷 (p.19, D5)
- 7 宇佐山城 (p.27, A6)
- 8 佐和山城 (p.28, D4)
- 9 山王鳥居 (p.31, A6)
- 10 供所神社・志津若宮神社 (p.31, A6)
- 11 日吉大社 (p.34, A6)
- 12 延暦寺 (p.37, A6)
- 13 慈眼堂 (p.39, A6)
- 14 坂本城 (p.46, B6)
- 15 壺笠山城 (p.47, A6)
- 16 沖島 (p.51, C5)
- 17 海津 (p.52, C3)
- 18 塩津 (p.53, C2)
- 19 余呉湖 (p.54, D2)
- 20 山本山城 (p.55, D3)
- 21 竹生島 (p.57, C3)
- 22 浮御堂 (p.60, B6)
- 23 堅田 (p.61, B6)
- 24 堅田城 (p.63, B6)
- 25 天然図画亭 (p.65, B6)
- 26 打下城 (p.70, B4)
- 27 歡喜寺城 (p.71, B5)
- 28 ダンダ坊 (p.73, B4)
- 29 日爪城 (p.74, B3)
- 30 大溝城 (p.75, C4)
- 31 清水山城 (p.77, B3)
- 32 田中城 (p.79, B4)
- 33 西教寺 (p.90, A6)
- 34 聖衆来迎寺 (p.91, A6)
- 35 盛安寺 (p.91, A6)
- 36 勢田橋 (p.109, B7)
- 37 多景島 (p.118, D4)



JR  
 私鉄  
 高速道路  
 国道  
 主要一般道  
 有料道



※本書中の「湖水」とは琵琶湖をあらわす。光秀の時代には、琵琶湖の表現はなく、「湖水」「大湖」「海」等と表現していた。

付録 信長と光秀年譜(近江を中心に)……………119

- トピックス
- ① 光秀多賀出生説 18
  - ② 囲船 66
  - ③ 信長の大船 80
  - ④ 百万遍不断念仏 光秀も聞いた鉦の音が続く 92
  - ⑤ 明智玉子(細川ガラシャ) 93
  - ⑥ 安土饗応膳 光秀は氷を手に入れた? 102
  - ⑦ 多景島と明智一族 118

- エピソード
- 1 勢田橋と光秀 108
  - 2 安土城 110
  - 3 光秀と安土城 112
  - 4 琵琶湖を離れて 山崎の合戦 114
  - 5 琵琶湖を見つめて 116
  - 7 本能寺の変 106

- 5章 本能寺の変へ……………94
- 1 光秀の絶頂 94
  - 2 信長と天皇 96
  - 3 光秀と天皇 97
  - 4 後期坂本城——信長の港 98
  - 5 琵琶湖に向かう信長 100
  - 6 光秀決意する 104
  - 7 本能寺の変 106

- 序……………2
- プロローグ 琵琶湖に出会うまで……………6
- 1章 登場から志賀陣……………8
- 1 信長との出会い 8
  - 2 上洛戦 9
  - 3 越前侵攻と金ヶ崎の退口 13
  - 4 志賀陣 16
- 2章 比叡山焼討ちと坂本城……………20
- 1 比叡山と琵琶湖——聖—— 20
  - 2 比叡山と琵琶湖——俗—— 22
  - 3 志賀陣から焼討ちへ 24
  - 4 焼討ちへ 宇佐山城と光秀 25
  - 5 焼討ち 30
  - 6 坂本城 40
- 3章 湖族光秀……………48
- 1 湖北湖上焼討ち 48
  - 2 堅田合戦 58
  - 3 高島攻め 68
- 4章 激戦と安住……………82
- 1 転戦する光秀 82
  - 2 光秀の病 84
  - 3 明智熙子 86
  - 4 西教寺 88
  - 5 聖衆来迎寺 91
  - 6 盛安寺 91

このプレビューでは表示されないページがあります。



▲小谷城から望む竹生島 小谷山を浅井岳と呼ぶ場合がある。浅井岳の山頂が琵琶湖に沈み、竹生島となったという伝説もある。

### ① 長政の裏切りと琵琶湖



長政殿が信長様を裏切った。何故？ 昨年（永禄十二年へー569）信長様は伊勢を手に入れた。

次は近江を完全に掌握するための手を打つだろうと思っていた。岐阜と京との往來を確保するため、そして何より京への物流を支配するためには、近

江と湖水を手に入れなければならない。信長様は、長政殿を縁者として、「江北を預けている」と言われるが、長政殿は決してそうは思っておられなかったのだろう。「俺は江北の領主だ！」。そんな長政殿の呻きが聞こえる。まして、長政殿は六角に勝ち、江北の積み出し港の大溝・海津・大浦・塩津、そして朝妻まで手に入れられた。すべて、信長様が喉から手が出るほど欲しがった。長政殿はいずれ「義兄が俺の港を奪いに来る」と警戒されていたに違いない。まして、今回の作戦で、越前が信長様の手に入ったら、完全に長政殿は信長様に取り込まれてしまう。

領国を持たない私なら、喜んで信長様にお任せし、領地の拝領を望むが、元々領国の主である長政殿にとって、信長様に配下のように扱われることは、我慢できなかつたのだろう。取り込まれる前に「殺るー」信長様が江北に背を



▲江北の主な港 東国・東海の物資は琵琶湖の港に集結し、坂本を目指す。長政は六角氏に勝利し、これらの港を手に入れた。

向けている今なら「殺れる！」そう思われたに違いない。

信長様に殿軍を任された。是非もなし。木下殿・池田殿と連携しながら敵を食い止め、信長様に無事お戻り頂く。戦うしかない。

この難関を切り抜けければ、私の展望も開けてくるに違いない。

### ② 金ヶ崎の退口

この信長の撤退戦を「金ヶ崎の退口」という。侵攻時、信長は湖西を通り、旧安曇川町から若狭街道に入り、若狭熊川宿から敦賀に向かった。湖西は長政の支配域であったが、この時点でまだ長政は同盟者だった。しかし、退却時は事情が違う。信長は敵地を突破して京に戻らなければならない。

この時、信長が選択した退路は、湖西の湖岸に戻るのではなく、旧今津町保坂から朽木に入り、安曇川沿いに南下するルートである。

しかし、この時、朽木をpushさえていた朽木元綱は、長政の高島侵攻に屈し、長政と臣従関係にあった。信長は元綱を説得し、ここを通過することに成功する。その背景には、元綱の長政

の侵略に対する反感と、將軍の奉公衆としての朽木氏の誇りがあった。越前への侵攻は、信長個人で行えるものではない。建前上、將軍義昭の名代として、信長が軍を動かした。であれば、奉公衆としての朽木氏が、將軍名代としての信長を守る理由が立つ。

信長の撤退路は、近世に入ると、若狭の海産物を京都に運ぶ道として活況



▲金ヶ崎城（敦賀市）敦賀湾を見下ろす金ヶ崎城は、若狭と越前に境目に位置し、争奪の舞台となった要衝地だった。



▲信長の隠れ岩 若狭街道を見下ろす斜面にある巨岩。伝説によれば、朽木元綱を説得する間、信長はここに隠れていた。



▲針畑越え この道も、鯖街道の一つ。若狭の武藤を牽制した光秀は、険しいが距離の短いこのルートを通り帰還した。

このプレビューでは表示されないページがあります。

とを窺わせる。東南寺の南を東南寺川が流れている(④)。現在は川が埋め立てられ水路状に狭まっているが、真つすぐに西から東に流れてきた東南寺川が、寺の南で流れを南東に変え、坂本城公園のデルタを形成する。この直進部分の延長と、明智塚から湖岸に並行して南に伸ばしたラインの交点を本丸の南西隅に想定する。

### 二の丸

下坂本の街中を近世の北国海道が貫いている(⑤)。この街道が近世の道としては異常に広い。乗用車が難なく離合できる広さがあり、大津市内を通る東海道の道幅とは全く異なり、近世の街道としては不必要なほどの広さがある。この不自然に広い道が、坂本城の中堀を埋めて造られた道と推定されている。

次に両社神社と酒井神社の間の道に着目する(⑥)。この道は、ここを流れ

る両社川をカルバート化して造られた道で、元々は川であった。この両社川の中堀の北辺と推定する。

次に、先に触れた東南寺川が東西に流れている部分を中堀の南辺と推定し、北国街道・両社川・東南寺川に囲まれた部分を二の丸として推定する。

### 三の丸

三の丸の推定起点は、酒井神社と両



▲東南寺前の石碑 東南寺川と北国海道が交差するところに建つ石碑とオブジェ。二の丸の南西隅に当たる。柵の右が堀跡。

社神社である(⑦)。酒井神社は大山咋神を祭神とする。縁起では奈良時代に、下坂本の梵音堂にある石から酒が湧きだし、この酒が大山咋神であるとの神告を受け、この石をご神体として祀ったことに始まる。一方、両者神社は、鎌倉時代に、伊邪那岐命・伊邪那美命を祭神とし、高穴穗神社の祭神を酒井神社の境内に勧請したことに始ま



▲中堀の出 両社川が湖岸で地表に顔を出す。石垣護岸は近現代のものであるが、光秀の時代の堀の雰囲気を守る。

る。酒井神社は信長の焼討ちにより焼失する。現在の本殿は、再建された坂本城の城主となった浅野長吉が、酒井神社の神に祈ったところ長男が生まれたことから、浅野家の産土の扱いを受け、長吉の長男で広島藩の藩主となった浅野長晟により元和六年(1620)に再建されたもので、再建の際に、酒井神社と両社神社の二社に分かれて建立された。長吉が酒井神社の神に祈った結果が長晟が生まれたということ、規模はともあれ、長吉の時代には酒井神社の社殿が再建されていたことになる。

そして、この両社と下坂本小学校との間に不自然な空き地が帯状に延びており(⑧)、この部分が坂本城の外堀の西辺の一部と推定されている。一方、下坂本小学校の北を藤ノ木川が流れていた(⑨)。現在の藤ノ木川はさらに北に付け替えられ、旧藤ノ木川は細い水



▲本丸付近 画像の建物の周辺が、本丸の推定地。その右手の湖中に石垣が残る。本丸跡からは、屋敷の跡も発掘されている。



▲渇水時に現れる坂本城の石垣 琵琶湖の水位が110センチほど下がると姿を現す。胴木を置き、この上に石を積み上げる。

路と里道として残されている。この旧藤ノ木川が坂本城外堀の北辺と推定されている。また、坂本城公園に東南寺川と並行して流れ込む信教寺川という細い川がある(⑩)。河口付近は現在のデルタに合わせて改修されているが、下坂本の集落内ではほぼ東西に真つすぐ流れる水路として残されている。こ

の直線部分が外堀の南辺と推定されている。そして信教寺川と旧藤ノ木川が、酒井神社・両社神社裏の空地の延長とぶつかるところが、各々外堀の西南隅と西北隅に当たり、これらの堀に囲まれた部分が三の丸となる。

大津市教育委員会の復元では、本丸の北辺を南北に延長し、北の旧藤ノ木

このプレビューでは表示されないページがあります。

### 3章 湖族光秀

#### 1 湖北湖上焼討ち

信長は、浅井長政が持つ江北の港を奪い取ることに失敗したばかりか、志賀陣では絶体絶命の危機に追い込まれた。しかし、元龜二年(1571)の佐和山城の奪取、同年の比叡山焼討ちを契機に長政に対する攻勢を強めてゆく。元龜三年三月、信長は小谷城下に侵攻し放火すると、豊みかけるように同年七月、再び湖北に攻め込む。信長は、二十二日、山本山の城下、越前との境にあたる余呉・木之本一帯を放火すると、二十四日、一転して、浅井山中の大吉寺に立て籠もる一向衆を殲滅する。そして同日、明智光秀らに命じて、湖上から海津・塩津・余呉の入海・湖北一帯、さらに竹生島にまで焼討ちを仕掛けた。

陸上と湖上を連動させた焼討ちは、長政の経済基盤である港を叩くとともに、長政を小谷城に追い詰め、孤立させ、さらに、長政家臣団の動揺を誘い、信長への寝返りを促そうとするものだった。



長政には痛い目にあわされ続けたが、佐和山城を落として、やっと勝機が巡ってきた。小谷城を攻めるのは簡単だが、あの堅城を力攻めすれば、多大な損害も覚悟せねばならない。



▲ 焼討ちのイメージ 光秀の時代、このような光景がしばしば見られたのだろう(画像は初夏の麦焼きの平和な煙)。

被害を最小限、できれば無傷で長政を葬りたい。そのためには、長政を小谷城に追い詰め、その周辺を徹底的に叩き、長政と家臣団との繋がりを分断してやる。

秀吉! 徹底的に湖北の地を焼き尽くせ! 百姓どもまで殺す必要はない。ただし、大吉寺に籠る一向一揆の門徒どもは、なで斬りにしろ。長政に呼応して他所から流れてきた連中だ。殺しても湖北運営には影響ない。容赦するな。

光秀! お前は堅田の殿原衆、打下の林と連動して湖上から長政の港を攻めろ。

僕は長政の港を全て奪い取る。そして湖水を全て支配する。そのための前奏曲だ!

光秀! お前なら僕の意図がわかるはずだ。江北の船人どもに、新たな湖水の支配者の登場を恐怖とともに刷り込んでやれ。



信長様は、湖上から湖北の港に焼討ちをかけると命じられた。堅田の殿原衆は信長様に好意的だ(堅田合戦、58頁)。打下の林も信長様になびいてきた(高島攻め、68頁)。しかし、まだ、船が足りない。沖島の連中の船も欲しい。

普通の船では反撃を受ける。「囲船」を造らせよう。そして仰々しく飾り立てよう。

者ども、私に従い船を走らせろ。まずは海津を攻める。そして塩津だ。二つとも、外海と湖水を結ぶ港。長政殿の資金源だ。

船上から鉄炮・大筒を放ったところで、さほどの威力がないことぐらい承知している。届く範囲で構わん、鉄炮・大筒・火矢も放って湖岸に火をかけろ。今回の戦の相手は船人だ。湖水に糧を求める奴らに湖水から攻めかかれ! 奴らが崇める湖水の神とは違う、圧倒



▲ 光秀による湖上焼討ちの進軍経路 坂本を本拠としていた光秀は、各地の船侍の船を集め湖西を北上し、まず海津を攻めた。

的な力を持つ、新たな湖水の神の到来を湖水から告げるのだ。鉄炮・大筒の轟音を放て! 太鼓・陣鐘を打ち鳴らせ! 湖水から攻められる恐怖を刷り込め! 新たな湖水の神は信長様だ! そして、お前らを支配するのは私だ! 気分が高ぶる!

このプレビューでは表示されないページがあります。

## ① 沖島

沖島は世界的にも稀な、淡水の湖に浮かぶ有人の島として知られている。沖島の歴史は古く、奈良時代に藤原不比等により、航海安全を司る宗像の神の内、多紀里姫を勧請し奥津島神社を建立したことに始まる。何故、古代国家の宰相が琵琶湖の孤島に、自ら神を迎える必要があったのか。それは、ひとえに沖島の地理的有意性にある。琵琶湖の東岸は西からの季節風が吹き付け、船の航行に支障をきたすことも多い。その中であって、沖島と、この東の奥島山に挟まれた水道は、沖島が季節風を遮るため、波穏やかな水面が広がることから、湖東航路を航く船は、好んでこの水道を使う。このため、必然的に、ここに航海の安全を託す神が迎えられることになる。

多紀里媛が迎えられて以降沖島は、人の住むことが許されない神の島として

て時を重ねたが、平安時代の終わりに頃、平家との抗争に敗れた源満仲の家臣達が、都を逃れ、沖島に住み着いた。これが、沖島と人とのかわりの始まりと伝えられている。そして、沖島はこの時以降、沖島水道を利用した水運、漁業の島としての歩みを始める。沖島は、琵琶湖水運により発展した



▲湖上から望む沖島 左の頭山と、右の尾山に接する狭い平地に、住宅が密集して建ち並ぶ。湖を生業の場として選んだ景観。

堅田(堅田合戦、58頁)との関係が深く、その影響を強く受けていた。応仁二年(1468)、京都花御所の造営木材を琵琶湖を使って運ぶ途中、堅田の殿原衆がこれを横領した。これに端を發し、堅田の街は、延暦寺の攻撃を受け壊滅する。当時、堅田の本福寺を中心に活動していた蓮如をはじめとする堅



▲沖島から見下ろす沖島水道 沖島から見下ろした沖島水道。水道を航行する船の動向をつぶさに把握することができる。

田の住人はことごとく沖島に逃れ、ここで二年余り暮らすことになる。

戦国時代に入ると沖島は、六角氏、次いで浅井氏、そして信長の支配下に入る。元亀三年(1572)、信長は長政を封じ込めるため、湖北に対する焼討ちを敢行するが、この時、先に紹介したように、光秀等が湖上からの攻撃を行った。この船を使った戦闘に沖島の船人が参戦している。焼討ちの一月月前、信長は沖島に対して早船を三艘、水主を付して用意し、堅田の船待達と行動を共にすることを求めている。早船という表現から、帆走する船ではなく、複数の櫂、もしくは櫓で航行する船で、これを囲船(トピックス②、66頁)に改造したと考えられる。



信長様が、湖水から長政殿の拠点を焼討ちするようお命じになられた。攻撃船団を造らねば。坂本の船だけでは心許な

い。堅田の船待達は船を出すことを了解してくれた。しかし、圧倒的な船数がほしい。

何？ 信長様が沖島の船人が船を供出し、

私に預けるようお命じになられたと！さすがだ、沖島・堅田の連中は船を自在に操る技術を持っている。ここに私が培った戦術を組み合わせれば、向かうところ敵なしだ。大船団を率いて湖北の湖に攻め込んでやる。気分が高揚するぞ。堅田衆・沖島衆！ 私に従い船を漕げ！



▲どんど焼き 沖島の正月に行われるどんど焼き。県下最大級の火の祭り。



▲魚港にひしめく沖島船団 沖島の暮らしを支えるのは船。光秀の時代にも、このような景観があっただろう。

沖島16 ◆近江八幡市沖島町 JR近江八幡駅よりバス 堀切で沖島通船乗り換え 県道25堀切港より通船

このプレビューでは表示されないページがあります。

## ② 滋賀の取手——ダンダ坊

信長の命により、光秀等が比良山中に造ったもうひとつの砦として、ダンダ坊遺跡が考えられる。

ダンダ坊は、比良山への登山口であるイン谷口から谷に沿って展開する、比良山中最大規模の寺院跡である。寺の坊跡群の中を登り詰めると、突然眼前に、石垣の壁が現われる。この最奥の坊の入り口は、直角に曲げられた複雑な構造を持つ。城郭の喰違虎口そのものである。寺院の入り口にこのような構造は必要ない。しかし、ここが光秀が寺を改造した城の館の入り口、と考えれば納得できる。館の中に入ると、広大な空間が広がり、その背後の高まりに巨石が立てられている。庭園の景石である。よく観察すると、ほぼ完全な形で庭園が残されていることが解る。館に庭園を構えるのは、一定の領国を支配する領主クラスの武家である。



▲喰違虎口 館の入り口。石垣の一部が崩れているが、明らかに通路を直角に曲げている。決して寺の構造ではない。

武家の庭園は、単なる芸術鑑賞の対象ではない。支配する者とされる者の身分の違いを確認するための服属儀礼の舞台装置として造られた。

庭園とは凝縮された小さな自然である。ダンダ坊の周りには比良の大自然が広がる。ここにあって人工の小自然を造る意味は、領国の中に宿り、領国

を護る、自然の神を招くことにある。自然に宿る神を小さな自然に招き、しかも館の中に閉じ込める。神の意に沿わなければ館の主は神罰が降る。しかし、神罰は降らない。ここにおいて、館の主は領国を司る神の支持を得て、領国を統治することを神に承認された、と主張することが可能となる。

主が、庭園を背景に盃を差し出す。これは神が差し出す盃でもある。これを押した瞬間、招かれた者は、主に従うことを誓うことになる。



光秀！ダンダ坊を接收し、ここに滋賀・高島を調略する拠点を造れ。

この城は、戦う事より従わせる儀礼の場としろ。そのために館に庭を造れ。庭の意味は解っているな。お前が坂本城に庭を造ることは許さんが、ダンダ坊に庭を造り、その前に座すことを許す。しかし、あくまでも僕の名代とし

ての光秀だぞ。そして滋賀・高島の地侍、特に打下の林は確実に僕に靡かせろ。林を落とさねば高島攻めはおぼつかぬ。



信長様はダンダ坊を城に改造せよと言われた。歡喜寺城と同様、比良の山に坐す神の力を城主の力にすり替える戦略か。

そして、信長様は、ここに庭を構えろとお命じになった。私は急ぎ、都より石立(庭師)を招き、庭を造らせた。

館の入り口には、滋賀・高島の地侍達が見たこともないような喰違虎口を石垣で造った。館に招かれた連中は一樣に畏れ、驚き、庭を背景に座した私が差し出す盃を押し頂いた。人を従えるということは何と心地よいことか。

しかし、打下の林はなかなか靡こうとしない。無理もない、湖水と若狭を結ぶ勝野津を押さえ、しかも難攻不落の打下城に籠っている。

说得だけではだめだ。

五月十九日。者ども！打下の林を牽

制し、高島木戸城下饗庭三坊の城を攻撃する。油断するな、風の如く疾く、火の如く侵掠せよ！

高島が燃えるさまを林に見せつけろ。鬨の声を上げる。信長様の力を林に見せつけてやれ！

その日、林は信長様に味方する旨を伝えて来た。私は林をダンダ坊に招き、対面した。林はひれ伏し、私の盃を受け取った。勝った！次は、他の高島の地侍達も調略し、木戸の城・田中の城を丸裸にしてやる。高島攻めが待ち遠しい。



▲館内の庭園 多くの古庭園は後世の改造を受けているが、この庭園は、高島攻めの役目を終えると、直ぐに廃絶された。築庭当時の姿を留める奇跡的な庭園である。

ダンダ坊 大津市北比良 JR湖西線比良駅下車徒歩90分 国道161より地方道322イン谷下車徒歩15分

このプレビューでは表示されないページがあります。

信長の  
大船

元龜三年（1572）の、三方ヶ原の戦いで信長の軍は、武田信玄に敗北を喫した。いつ我が領国に信玄が侵攻して来てもおかしくない情勢だった。信長の危機を見て義昭も不穏な動きを見せ始めた。信長は焦った。

しかし、何と、翌年四月、信玄は病に倒れ死んだ。九死に一生を得たとはこの事。この機会を捕らえ、一気に攻勢に転じてやる。

そのために、信長の力を視覚的に見せつけるための構造物が欲しい。しかも、信がかねてから支配を目論む湖水に。

信は、宮大工の岡部又右衛門に命じた。「又右衛門！今すぐ、この世の誰も見たことがない巨大な船を造り、湖水に浮かべろ！」

又右衛門の返答が面白かった。「すぐにお造りしますが、浮かんでいるだけでよろしゅうございませぬ？」

信はすぐさま応えた。「操船に難があっても構わん。湖水を信が支配したことを天下に実感させる船を造れ！」

信の意を受け、又右衛門は佐和山城の麓で総力を結集し、わずか四十五日程で、長さ五十四呎、幅十三呎、前後

に櫓をあげ、百丁の櫓で動かす大船を作った。無論、宮大工の又右衛門に船など作れるはずがない。奴は、同型同大の板と柱を大量に調達し、これを釘と梁、長押で固めた「水に浮かぶ箱」を造ったにすぎぬ。しかし、信は満足だった。

この船を見た天下の驚きは、いかばかりか。宣教師に聞くところによれば、ヨーロッパにもこのような巨大な船はないという。世界最大の船が湖水に浮かんだ！

信の気分は高揚した。大船ができたその時、將軍義昭が公然と信に歯向かってきた。絶好の機会だ。信は大船に乗り、光秀に任せている坂本城に乗りつけ、難なく義昭を倒し、室町幕府に終止符を打った。

そしてすぐさま、信は、長政に味方する高島を討つため、陸上軍を侵攻させると同時に、大船に乗り、高島表に進軍した。これを見た高島衆はさしたる抵抗もなく我が元に降った。大船の放つ力に降ったのだ。

その後、大船を湖水と都の境目、天下の耳目の集まる坂本城に、信の権威を見せつけるモニュメントとして係留させた。

天正三年（1575）、信は、長篠設楽原の合戦で宿敵武田勝頼を破り、東国からの脅威を払拭した。これで岐阜を

離れ、神として湖水に座し、天下を治める準備が整った。

信忠に岐阜城と家督を譲ると翌天正四年正月、信は、かねてから目をつけていた安土山に信の神殿の建立を始めた。そして、天正七年、安土城天主が完成し、信はここに座した。

もう、大船は要らん。

安土城ができた時、大船の役割は終わった。いや、急ごしらえの張りぼてのモニュメントは、信の権威を貶める事にも繋がりがかねない。

信は、堅田の船侍に命じて、大船を解体させ、その材で早船を十艘造らせ、光秀に預けた。

しかし、大船が居なくなるのと、今度は坂本城が急にみすばらしく見えてきた……。



▲大船 宮大工岡部又右衛門が造った船は、水に浮かぶ箱状の船だった。恐らく湖水を自在に航行する事はできなかったであろう。しかしその大きさが最大の力だった。櫓に信長が立つ。



▲大船と囲船 大船に光秀が乗った囲船が近づく。両船とも同じスケールで造ってある。小さく見える囲船だが、コロンブスのサンタマリア号と、ほぼ同じ長さである。大船の巨大さを感じてほしい。

このプレビューでは表示されないページがあります。

1 転戦する光秀

天正元年（1573）、信長は宿敵浅井長政を倒し、その余勢をかって、抵抗を続ける六角義賢を近江から完全に駆逐する。これにより、近江国内の戦乱に、ほぼ終止符が打たれる。

光秀は、堅田攻略、高島攻めと、近江及びその周辺での戦いを主導、あるいは、連動して戦っていたが、信長の戦端が拡大するのに呼応して、近江国外での戦いに参軍するようになる。信長の主だった軍団が越前や中国に張り付いていたため、比較的自由に動けるのが光秀の軍団だけ、という事情もあった。

天正三年（1575）、信長は京の背後にある丹波攻めを光秀に命じる。丹波は信長と比較的友好的な地域であつた。

不幸にも見舞われた。

この超人的ともいえる光秀の戦いは、総て信長の命令によるものであり、光秀はこれに忠実に応え、大きな成果を上げていった。その結果、光秀は天正七年頃には、京・大和・大阪の一部を管掌する「近畿管領」的な役割を担うことになる。信長と光秀は、強い信頼関係で結ばれていたように思える。このような激務の中に身を置く光秀ではあったが、正月には坂本城に帰城し、連歌の会、茶会を催している。戦いの連続で気の休まる暇もない光秀にとって、さざなみ打ち寄せる坂本城は、



▲麒麟阿形 西教寺の宗祖大師殿の唐門に刻まれた麒麟。中央向かって左が吽形、右が阿形で二頭の麒麟が向かい合っている。

だが、信長が義昭を追放したことをきっかけに、將軍寄りの武家達が公然と信長へ歯向かって来たためである。都を安定的に治めるためには、丹波の平定が不可欠である。以後、光秀は、丹波での死闘を繰り返すことになる。特に、天正四年一月、光秀は、黒井城攻めで、八上城にいた波多野秀治の裏切りに遭い大敗を喫し、坂本城に逃げ帰った。これに対し、信長は光秀の敗北を責めることなく、丹波攻めを継続させる。状況を理解したうえ、敗北は止む無しと判断し、光秀の能力と可能性を高く評価した結果である。光秀は信長の期待に応え、天正七年（1579）黒井城を落とし丹波を平定する。五年に及ぶ長い戦いであった。この功績に対し翌天正八年、信長は光秀に丹波一国二十九万石を与え

る。これに滋賀郡五万石を加え光秀は、三十四万石の大名となった。

五年にも及ぶ丹波攻めの間、光秀は丹波攻略のみに従事していたわけでは無い。丹波攻めの間隙を縫うように、越前・加賀への侵攻、石山本願寺攻めへの参戦、紀伊雑賀衆との戦い、大和信貴山城への攻撃、信長を裏切った荒木村重との戦いへの援軍、さらには備中、因幡まで軍を進めている。そしてその間に、近江滋賀郡の運営、京都の運営等の政治的な職務をもこなしていった（119頁からの年表参照）。

さすがの光秀も激務に耐えかね、天正四年の石山本願寺との戦いの途中で体調を壊し、一時戦線を離脱するという事態に陥った。さらにこの時、光秀を献身的に看病した最愛の妻明智熙子（ひろこ）が、看病の疲れからか急死するという

心安らぐ唯一の場所だったのかもしれない。

そして、同時に、西教寺に対する帰依も深めてゆく。いつ果てるかもしれない



▲麒麟吽形 麒麟は王が徳のある政治を行うと出現する霊獣。虫や植物を踏むのも嫌がるほど殺生を嫌う心優しい獣である。

寺もまた、光秀にとってかけがえない安寧の地だったのだろう。



体を休める間もなく、私は戦い続けた。目的がない。信長様に命じられるままに戦い続けた。

私の働きに、信長様は十分に応えてくださった。近畿管領二百四十万石を實質切り盛りする立場にもなった。

坂本城から、そして妻が眠る西教寺から望む湖水の景色だけが、私の疲れを癒してくれる。ありがたい。この湖水を眺めながら余生を過ごしたい。

い戦場に身を置く光秀にとって、浄土への憧れも強かったことだろう。琵琶湖を見下ろす高台に建ち、妻熙子が眠る西教

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 安土饗応膳 光秀は氷を手に入れた？

天正十年（1582）、甲斐掃討戦に勝利した信長は、武田氏の遺領の配分を行う。この時厚遇された徳川家康と穴山梅雪は礼のため、連れ立って安土城を訪れる。五月十五日、信長はこの接待役を光秀に命じる。光秀は、京、堺から山海の珍味を集め、十七日まで家康らを接待した。

この時の饗応のメニューの内、十五日の二回、十六日の二回、点心（デザート）一回のメニューが残されている。

この内、最初の「落ち着き」の復元を行った。この膳は、本膳から五の膳まで二十八種類の料理と「御くハし（お菓子）」四種類で構成される。海・湖の魚と鳥により構成され、四つ足の動物の料理は全く含まれていない。また、当時の調味料には、醤油と砂糖は無く、味噌・酢・酒にほぼ限られた味付けの料理である。見た目は豪華ではあるが、現代人の味覚とは乖離した料理かもしれない。

数ある料理の中で、二の膳に登場する「海鞘の冷や汁」が目を引いた。「冷や汁」を「冷えた汁」とするか「冷やした汁」とするかにより、料理の持つ意味合いが全く異なってくる。饗応は旧暦の五月十五日に行われた。新暦に置き換えれば七月の中旬で、暑さが厳しい季節である。最高のも



▲安土饗応膳「をちつき」饗宴とは、もてなしと同時に、相手に主の力を見せつける戦いの場でもある。

てなしに「冷めた汁」は考え難い。積極的に汁を冷やしたとすれば、光秀は、氷を入手していたとしか考えられない。古来、夏に氷を扱い、これを臣下に分け与える行為は、天皇の専権事項とされていた。何故なら、夏に氷を得ることは超自然的行為であり、自然をも意のままに扱い得る天皇の権威を具体的に示す行為として、重視されていたためである。このため、京都の周辺、奈良、近江に朝廷の氷室が置かれ、天皇のための氷を貯蔵していた。しかし、律令制の崩壊と共に天皇の氷室は姿を消した。

光秀が領していた滋賀郡の龍華には、古代から「氷室」が設置され、夏まで、氷を貯蔵し、これを天皇に納めていた。この故事を知る光秀、或いは信長の命令により、安土に最も近い龍華の氷室の復活が、なされていたのかもしれない。



光秀、今回の接待は家康をもてなす私的なものだ。しかし、お前は解っているだろうが、近い将来天皇を安土城に招き、ここで僕は天皇とのメンタルな戦いをする。

当然、天皇に対する饗応もその戦いの中で行う。その予行演習が、今回の饗応だ。抜かりなく勤める！



今度は、家康殿、梅雪殿の

接待を命じられた。近い将来執り行う天皇への接待の予行演習でもあるという。山海の珍味、最新の料理を用意しよう。

そうだ、頃は夏。

龍華に秘蔵している氷を料理に使う。夏の氷は王権の象徴。氷室を維持できなくなった天皇に対し、信長様の氷を差し上げる。料理で、天皇に王権の交代を悟らせよう。料理も戦だ。



▲海鞘の冷や汁 海鞘は生で復元したが、塩漬けの可能性もある。光秀はここに氷を浮かべた？



▲二の膳 左上から、貝鮑・うるか・宇治丸(鰻)・ふとに(なまこ)・鱧・鯉の汁・海鞘の冷や汁。

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 7 本能寺の変

天正十年（1582）五月十七日、光秀は坂本城に帰り、中国攻めの準備を行うが、この時点で信長を裏切るタイミングを計っていた。光秀は、秘かに坂本城の天主に登り、安土城を凝視していた。



もう、決定は覆らないのだろうか？

信長様を裏切るのは辛い。

何か良い手立てはないか？

信長様の性格を考えれば、従うか背くかの二択しかない。

未知の土地での栄華を選ぶか、湖水を選び、湖水の魅力には勝てぬ。

やはり、湖水の魅力を勝てぬ。

信長様を倒し、あの安土の城から天下に号令するしか道はない。

五月二十六日、光秀は坂本城を立ち、丹波経営のために整備した亀山城

に入り、丹波の軍勢を結集させる。

五月二十七日、京都愛宕神社に詣で、戦勝を祈願する。この時、何度も御神籤を引いたと伝えられる。



神となった信長様と戦うには、神の加護が欲しい。

愛宕大権現、勝軍地藏菩薩、私に力をお貸しくだされ。

この日は愛宕山に泊まり、翌二十八日、愛宕山西林坊で連歌を興行する。この時の光秀の発句が「ときは今あめがしたしる 五月かな」である。この句の意味に関しては、「美濃の土岐氏の流れをくむ光秀が天下を取る時が来た」と解されることが多いが、光秀の謀叛を強調するため「あめがしたなる」を「あめがしたしる」に改竄されたとする考えもある。

同二十八日、光秀は連歌を愛宕山に奉納すると亀山城に帰城する。

翌二十九日、信長が小姓衆等僅かな

手勢を引き連れ上洛。本能寺に入る。

この日の光秀の動向を示す資料はない。信長に対する謀叛を胸に秘め、外見上は中国出兵の準備を装い、この日のどこかの段階で、主だった者達に、謀叛を打ち明け、同意を求めたものと考えられる。

翌六月一日、信長は本能寺で茶会、来客への対応に追われる。この日の夜、光秀は亀山城を出、京に向かう。

翌六月二日未明、光秀は本能寺を襲撃し、信長を自害に追い込む。

『信長公記』「明智日向守逆心の事」より

「さる程に、不慮の題目出来候て、六月朔日、夜に入り、丹波亀山にて惟任日向守光秀、逆心を企て、明智左馬助、明智次右衛門、藤田伝五、斎藤内蔵佐、是れ等として談合を相極め、信長討ち果たし、天下の主となるべき調儀を究め……」

『信長公記』「信長公 本能寺にて御腹めされ候事」より

「六月二日」ときの声を上げ、御殿へ鉄炮を打ち入れ候。是は謀叛か、如何なる者の企てぞと、御諒のところ、森乱申す様に、明智が者と見え申し候と、言上候へば、是非に及ばずと、上意候。……信長、初めは、御弓を取り合ひ、二、三つ遊ばし候へば、何れも時刻到来候て、御弓の弦切れ、其の後、御槍にて御戦ひなされ、御肘に槍疵を被り、引退き、是まで御そばに女どもつきそひて居り申し候を、女はくるしからず、急ぎ罷りい出でよと、仰せられ、追ひ出させられ、既に御殿に火を懸け、焼け来たり候。御姿を御見せあるまじきと、おぼしめされ候か、殿中奥深く入り賜ひ、内より御南戸の口を引き立て、無情に御腹めされ……」



何？ 光秀が謀叛を起こし攻め込んできた？

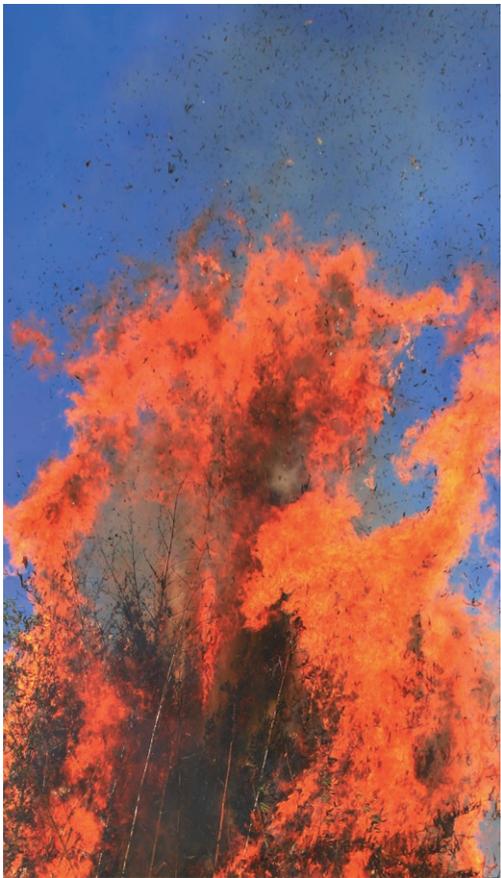
何故じゃ？ 確かに辛い戦いを強いた。しかし、それに見合う待遇はしてきた。何が不足なのか？

そうか、あの一件か。湖水を離れ、西国を切り開けと命じた時、珍しく逆らいおった。湖水から離れることが、奴には耐えられなかったという事か。



終にやっちゃった。信長様を倒し、信忠様も倒した。

一刻も早く、安土城天主に登り、新たな天下の主、そして湖水の主が私であることを宣言しなければ。



▲ 燃え盛る 決断の後には実行あるのみ。

このプレビューでは表示されないページがあります。



私は、坂本城から安土山が日々姿を変えてゆくのを眺めていた。工事の怒号が坂本まで聞こえてくるようだった。やがて、安土山が石垣で覆われ、白く輝くのが見えるようになった。宇佐山城の比ではない。そして、信長様の座す天主がその姿を見せ始めた。凄い！夕日を浴びて天主は黄金に輝いて見えた。まさに信長神の神殿。

あの神殿に座すことが、湖水の力を身に纏い、日本を従えることを意味するのだろうか。しかし、私はそんなことは望んでいなかった。湖水の畔の坂本城にあり、近畿管領的立場に十分満足していた。私も年老いた。このまま安寧に暮らしたかった。しかし、信長様は私を新たな戦いの場に駆り立てたばかりか、坂本城まで私から取り上げた。



▲湖水に浮かぶ安土城 全国数ある城郭の中で、周辺の景観を含め「美しい」城は安土城だけかもしれない。

絶望した私は、本能寺で信長様を亡きものとした。謀叛の後どうするかを綿密に計算していたわけではない。何とかなる。とにかく、湖水の元を離れるのが耐えられなかった。

だからこそ、信長様が湖水を支配、いや、湖水と一体化することを目指し、築城した安土城に一刻も早く入城し、新たな湖水の主となったことを、安土城から宣言したかった。そのためには、謀反を正当化し、私が安土城の主となったことを認める「朝敵信長を討ち、近江、畿内を安堵せよ」という天皇の綸旨を、安土城でお受けする必要があった。綸旨を賜り、謀反が正当化されれば、天下などいらぬ。近江一国を私のものとするのができれば、他の国々は配下に分配しても構わないと思っていた。天皇は私の意を汲み、直ちに綸旨を与えてくださると思っていた。天皇が信長様と戦えば敗北することは明らかだった。私は天皇の恩人なのだから。私は、信長様を倒すと同時に、安土城に入り、信長様のご家族を人質にし、無傷の安土城で、天皇の勅使を迎えるつもりだった。しかし、勢田橋を護る

山岡は、私の誘いを断ったばかりか勢田橋を焼き落とすという、行動に出た。誤算だった。さらに、信長様のご家族は蒲生賢秀が連れ出し、日野城に籠ってしまった。あまつさえ、賢秀は、安土城の財宝も無傷で残して退城した。これでは、まるで私が安土城の財宝を目当てに乱を起こしたように見えるではないか。まずい。

〔六月四日：秀吉が本能寺の変を知る〕  
結局、私が安土城に入ったのは六月五日になってしまった。入城までに三日間もロスしてしまった。私は直ぐに軍を長浜城、佐和山城に派遣しこれを接収した。これで念願通り、湖水は我がものとなった。

始めて安土城の天主に登った。何となく眺めか。長浜城も、竹生島も、大溝城も、当然私の坂本城も一望できる。美しい。安土城からの湖水の眺めは、坂本城からの眺めとは全く違う。湖水

の力が私の体の中に染み込んでくるような錯覚を覚えた。今、私は湖水の王となった

〔六月六日：秀吉備中高松城を出て、大返しを始める〕

六月七日、待ちに待った天皇からの勅使として、旧知の吉田兼見が、誠仁

親王からの戦勝祝いの進物を携え、下向して来た。しかし、期待していた「朝敵信長を撃つ」の綸旨はなかった。その夜、私は兼見に、謀反に至った経緯と思いのたけを訴えた。兼見はただ聞いていた。

〔六月七日：秀吉、姫路城まで戻る〕



▲安土山から昇る朝日 一月下旬、太陽は安土山の頂上から昇る。この光の中に安土城天主が浮かび上がる。まさしく神殿。

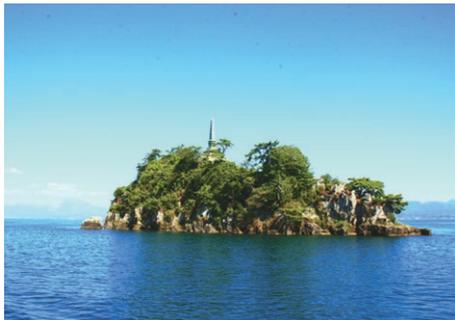
このプレビューでは表示されないページがあります。

多景島と明智一族

琵琶湖に浮かぶ孤島「多景島」。その片隅に「湖水渡左馬之介秀満一族郎党之霊」と書かれた、朽ちかけた木製の供養塔が建っている\*。

左馬之介秀満とは、明智光秀の娘を妻とした光秀の重臣で、本能寺の変では先鋒を務めた。光秀と共に安土城に入城し、安土城の守備に就いていたが、山崎の合戦で光秀が敗北したことを知ると、秀吉軍を迎え撃つべく安土城を出、坂本城を目指す。大津市打出浜付近で堀秀政の軍と遭遇し、進路を阻まれた秀満は、愛馬と共に湖水に飛び込み、坂本城に泳いで帰城した。「明智左馬之介湖水渡」である。坂本城に戻ると秀満は、光秀遺愛の重宝類が失われることを惜しみ、城を囲む堀秀政に渡すと、光秀の家族、自分の家族を殺し、坂本城の煙硝に火を放ち、燃え盛る城の中で自害した、と伝えられる。

何故、多景島に秀満の供養塔が？ 多景島は日蓮宗見塔寺を守る琵琶湖の聖地である。現在の御住職が島に入られた時、一人の武者が現われた。そして、「私は湖水を渡り、主の城を護ろうとしたが叶わず命を絶った明智左馬之介。」



▲多景島 多景島には航海安全を護る神が祀られていた。現在は、日蓮宗見塔寺が島を護っている。



▲明智左馬之介供養塔 この塔には、湖水と共に生きた数多の霊への供養の気持ちも込められている。

湖水の真ん中に浮かぶこの島に我が霊を祀って欲しい」と告げたという。琵琶湖に浮かぶ多景島では、水難者や、食料となった魚介類の霊を慰める供養を毎年行っていた。それを知ってか、琵琶湖に浮かぶ坂本城と共に命を落とした明智一族の魂は、光秀や熙子のように、琵琶湖に宿る事を望んだのだろう。そして、琵琶湖の真ん中に浮かぶ多景島の僧に、その供養を依頼した。後に、礼装の馬に乗った武者が、御住職の元に現れ、礼を述べたという。

\*多景島⑦▼彦根市彦根港(彦根市松原一丁目)より定期船(有料)※2018年の台風により、画像の供養塔は倒れてしまった。

付録 信長と光秀年譜 (近江を中心に)

※天正二年以降の●印は転載する光秀の動向を示す。

和暦	西暦	月	信長	光秀
永禄9年	1566	8月	美濃斎藤氏を倒し岐阜城に入る	高島田中城に籠城(采田家文書)
永禄10年	1567	7月	光秀から義昭の上洛支援を要請される	義昭と共に在越前?
永禄11年	1568	8月	上洛に備え、六角承禎説得のため佐和山へ	信長と光秀の出会い
		9月	上洛戦敗行のため、岐阜を出陣し高宮に着陣	●16日 義昭一行小谷城着
		8月	愛知川近辺に野陣	●17日 義昭一行小谷城着
		7月	箕作山城を攻め、これを落とし、箕作山城に着陣	●18日 義昭一行小谷城着
		6月	観音寺城を攻め、占拠	●19日 義昭一行小谷城着
		5月	義昭を桑實寺に迎えた後、守山に侵攻	●20日 義昭一行小谷城着
		4月	琵琶湖を渡り、三井寺極楽院に陣	●21日 義昭一行小谷城着
		3月	義昭を桑實寺に迎えた後、守山に侵攻	●22日 義昭一行小谷城着
		2月	参内し、義昭15代將軍宣下を受ける	●23日 義昭一行小谷城着
		1月	京都東福寺に陣を移す	●24日 義昭一行小谷城着
永禄12年	1569	10月	岐阜城へ帰城	●25日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●26日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●27日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●28日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●29日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●30日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●31日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●32日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●33日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●34日 義昭一行小谷城着
永禄13年	1570	10月	「五カ条の条書」で義昭を牽制	●35日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛のため、岐阜城を出る	●36日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●37日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●38日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●39日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●40日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●41日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●42日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●43日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●44日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●45日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●46日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●47日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●48日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●49日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●50日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●51日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●52日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●53日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●54日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●55日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●56日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●57日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●58日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●59日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●60日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●61日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●62日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●63日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●64日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●65日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●66日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●67日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●68日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●69日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●70日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●71日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●72日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●73日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●74日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●75日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●76日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●77日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●78日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●79日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●80日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●81日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●82日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●83日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●84日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●85日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●86日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●87日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●88日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●89日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●90日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●91日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●92日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●93日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●94日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●95日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●96日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●97日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●98日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●99日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●100日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●101日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●102日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●103日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●104日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●105日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●106日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●107日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●108日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●109日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●110日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●111日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●112日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●113日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●114日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●115日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●116日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●117日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●118日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●119日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●120日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●121日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●122日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●123日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●124日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●125日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●126日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●127日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●128日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●129日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●130日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●131日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●132日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●133日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●134日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●135日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●136日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●137日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●138日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●139日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●140日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●141日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●142日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●143日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●144日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●145日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●146日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●147日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●148日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●149日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●150日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●151日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●152日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●153日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●154日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●155日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●156日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●157日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●158日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●159日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●160日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●161日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●162日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●163日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●164日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●165日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●166日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●167日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●168日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●169日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●170日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●171日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●172日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●173日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●174日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●175日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●176日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●177日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●178日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●179日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●180日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●181日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●182日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●183日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●184日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●185日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●186日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●187日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●188日 義昭一行小谷城着
		12月	上洛	●189日 義昭一行小谷城着
		11月	上洛	●190日 義昭一行小谷城着
		10月	上洛	●191日 義昭一行小谷城着
		9月	上洛	●192日 義昭一行小谷城着
		8月	上洛	●193日 義昭一行小谷城着
		7月	上洛	●194日 義昭一行小谷城着
		6月	上洛	●195日 義昭一行小谷城着
		5月	上洛	●196日 義昭一行小谷城着
		4月	上洛	●197日 義昭一行小谷城着
		3月	上洛	●198日 義昭一行小谷城着
		2月	上洛	●199日 義昭一行小谷城着
		1月	上洛	●200日 義昭一行小谷城着

このプレビューでは表示されないページがあります。

## 著者紹介

**大沼 芳幸** (おおぬま よしゆき)

## 略 歴

1954年山形県新庄市生まれ。1982年私立佛教大学博士後期課程中退。1983年滋賀県教育委員会文化財専門職員採用、2011年滋賀県立安土城考古博物館副館長を経て、2015年より公益財団法人滋賀県文化財保護協会普及専門員。2016年「琵琶湖八珍の取り組み」に対して博物館活動奨励賞受賞。NPO法人歴史資源開発機構 主任研究員。

## 専門分野

琵琶湖をめぐる文化史を考古・歴史・美術・民俗・漁業・環境など幅広い視点から研究し、成果の普及活動を行っている。

## 主な著作

(単著)『白洲正子と歩く琵琶湖—江北編 山、命生む母性への祈り』海青社、2019  
(単著)『白洲正子と歩く琵琶湖—江南編 カミと仏が融けあう処』海青社、2018  
(単著)『琵琶湖八珍—湖魚の宴絶品メニュー』海青社、2017  
(単著)『信長が見た近江—信長公記を歩く』サンライズ出版、2015  
(共著)『おいしい琵琶湖八珍—文化としての湖魚食』サンライズ出版、2015  
(共著)「琵琶湖沿岸における水田開発と漁業—人為環境がもたらした豊かな共生世界」吉川弘文館「環境の日本史2」、2013

ほか

## AKECHI Mitsuhide and Lake BIWA

by OONUMA Yoshiyuki

あけちみつひでとびわこ

## 明智光秀と琵琶湖



本書のHP

発行日：2019年10月20日 初版第1刷

定 価：カバーに表示してあります

著 者：大 沼 芳 幸

発 行 者：宮 内 久

印刷・製本：亜細亜印刷株式会社



〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4  
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688  
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>  
郵便振替 01090-1-17991

© OONUMA Yoshiyuki, 2019.

ISBN978-4-86099-368-9 C0021 Printed in JAPAN.

落丁・乱丁の場合は弊社までご連絡ください。送料弊社負担にてお取り替えいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。